

UGSAS-GU NEWS LETTER

ISSUE 14 January to December 2025

The United Graduate School of Agricultural Science,
Gifu University 2025

第14号発行にあたり

2025年度、岐阜大学では、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構による大学機関別認証評価を受審するとともに、第4期中期計画期間の事前評価である4年目終了時評価に向けた準備を進めております。連合農学研究科においては、これまでインダストリー部会を通じた社会ニーズの取り込みや、IC-GU12を通じた国際的な教育研究の評価を受けてきました。しかし、外部認証機関や政府による評価は、より厳格で重みのあるものであると痛感しております。外部からの指摘は真摯に受け止め、必要な改善を進めてまいります。研究科の実情や理想と必ずしも一致しない内容もあり、対応に苦慮しているところです。

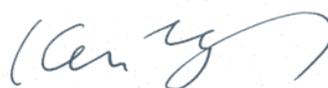
特に指摘を受けているのは、定員管理、標準年限内の修了率、修了後の就職率です。入学者数については、定員の1.5倍を超えていることが問題視されました。その背景には、時限的制度である国費優先配置やSpring事業による支援があり、入学希望者数は将来的に変動が予想されるため、定員の変更は困難です。そのため、より厳格な入試による定員管理を目指さざるを得ませんが、博士課程の学生は高度に専門化しており、分野の異なる志願者間で優劣をつけることは容易ではなく、科学や社会にとって望ましい選抜なのか葛藤があります。

また、標準年限内の修了率についても、基準を緩和すれば解決は容易ですが、学生の成長や学位の質保証の観点から望ましいとは言えません。研究科としては、質と時間の両立を目指し、学生へのサポートとエンカレッジを強化することに努めるしか策はなさそうです。

研究科としてはいくつかの課題を抱えておりますが、修了生たちは素晴らしい業績を重ねてくれております。2022年9月から2025年9月までの修了生の在学期間中の投稿論文数を集計したところ、筆頭著者のものが172編、そのうちTOP10%ジャーナル（SCOPUS基準）に掲載されたものが19.2%、Q1ジャーナルに掲載されたものが65.1%（TOP10%ジャーナルを含む）であり、学生一人当たりの掲載数は2.23編、共著者のものを含むと掲載数は3.03編となりました。これらは、研究科の教育・研究環境の質を示す重要な成果であると考えております。

本研究科の発展と学生支援にご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

岐阜大学大学院連合農学研究科長



平松 研

岐阜大学大学院連合農学研究科
2025年1月～12月



IC-GU12 ラウンドテーブルミーティング2025

Faculty of Agriculture, Shizuoka University

November 10th, 2025



11月10日、岐阜大学連合農学研究科（以下UGSAS-GU）は、南部アジア地域における農学系博士教育連携コンソーシアム（IC-GU12）のラウンドテーブルミーティングを開催しました。今回は、初めて静岡大学農学部を会場として実施しました。

IC-GU12は、日本を含む南アジアおよび東南アジアの9か国から21大学が加盟する国際的なコンソーシアムです。今回の会議には、対面参加27名、オンライン参加4名の合計31名が出席しました。会議は、連合農学研究科長・平松研教授による開会挨拶で幕を開けました。



本年度のラウンドテーブルミーティングでは、「農学分野におけるAI・データサイエンス教育」をテーマとし、農学分野におけるAI活用およびデータサイエンスの重要性について議論を行いました。

各大学からは、博士課程教育へのAI導入のあり方、教員研修に関わる課題、データ品質の管理、倫理教育の必要性など、幅広い論点が挙げられました。また、必修AI科目の導入、オンライン相談システムの整備、学際的アプローチを促進する取り組みなど、先進的な事例も共有されました。

会議の総括として、IC-GU12におけるデータサイエンス教育ネットワークの構築、博士課程レベルでの共同カリキュラムの検討、教材や倫理ガイドラインの共有による連携強化などが提案されました。さらに、今後も継続的な情報交換を行い、共同研究の推進に努めることが確認されました。



第6回アジア収穫後システムの品質管理に関するシンポジウム (ASQP2025)

11月11日～13日、第6回アジア収穫後システムの品質管理に関するシンポジウム（ASQP2025）が、静岡市の静岡コンベンション&アーツセンター「グランシップ」にて開催されました。本シンポジウムは、ISHS（国際園芸学会）、JSHS（日本園芸学会）、岐阜大学、静岡大学の共催により実施されました。

Shizuoka Convention and Arts Center Grandship
November 11th to 13th, 2025



本シンポジウムには、収穫後の品質管理に関する最新の知見を共有するため、18か国からの参加がありました。収穫後科学および関連分野における最新の進展に関する基調講演が行われ、活発な議論が展開されました。

本研究科からは9名の学生が参加し、口頭発表およびポスター発表で研究成果を発表しました。生物生産科学専攻2年のNahar Ashrafunさんが、ISHS Young Minds Award for the Best Oral Presentationを受賞しました。閉会にあたり、収穫後システムの強化に向けた持続可能な取り組みと地域間協力の重要性が強調されました。



UGSAS-GU ポスタープレゼンテーション 2025

Faculty of Agriculture, Shizuoka University

November 10th, 2025



Best Presentation Award

SONG YUJIE (2年)
ZHANG HANGHANG (1年)
Kieu Thi Hoang Yen (3年)
Abdi (3年)
Nahar Ashrafun (2年)

11月10日午後、静岡大学農学部にて「UGSAS-GUポスタープレゼンテーション2025」が開催されました。岐阜大学配置29名、静岡大学配置15名、合計44名の学生が参加し、研究成果をポスター形式で発表しました。

会場では、教員や学生、来場者との間で活発な意見交換が行われ、研究に関する多様な視点が共有されました。本イベントは、学生にとって研究成果を広く発信し、最新の動向を把握し、今後の研究に活かすための機会となりました。

発表終了後には投票により優秀発表者が選出され、5名の学生が Best Presentation Award を受賞しました。



UGSASキャリアセミナー

July 14th, 2025



7月14日、シンガポール国立大学メカノバイオロジー研究所のリサーチフェローである西村亮祐博士を講師に迎え、キャリアセミナーが開催されました。

西村博士は、海外でのポスドク研究者としての経験を紹介し、フェローシップの獲得方法、海外研究室の選び方、日本とシンガポールにおける研究生活の違いなど、実践的なアドバイスを提供しました。

セミナーでは活発な質疑応答が行われ、博士課程修了後のキャリアパス、海外ポスドクの利点、国際経験が学術的キャリアに与える影響などについて議論が交わされました。参加者は31名にのぼり、グローバルな研究の機会を検討している学生にとって非常に有益な内容となりました。

研究インターンシップ報告会

May 28th, 2025

2025年5月28日、第14回研究インターンシップ報告会が開催されました。インドネシア、バングラデシュ、日本の各機関でインターンシップを経験した博士課程学生3名が、それぞれの体験を共有しました。

学生たちは、研究テーマや習得したスキル、さらにインターンシップが学術的成長やキャリア形成にどのように役立ったかについて発表しました。報告会には、岐阜大学の教員・学生17名が対面またはオンラインで参加しました。

発表後には活発な意見交換が行われ、国際的な研究経験の重要性が改めて強調されるとともに、博士課程教育におけるインターンシップのさらなる活用を促す内容となりました。

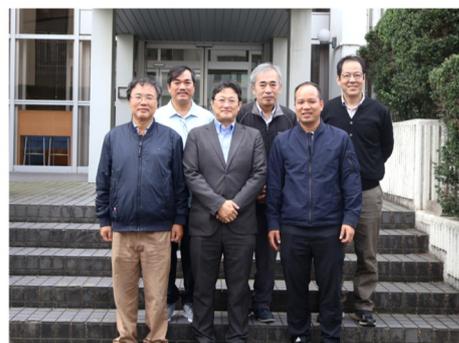


チュイロイ大学来訪

November 6th, 2025

11月6日、ベトナム、チュイロイ大学 (Thuyloi University) から Nguyen Canh Thai 副学長、Le Quang Tuan 副学部長、Bui Quang Cuong 講師をお迎えました。この訪問は、前研究科長である千家正照名誉教授のご尽力により実現しました。

面談では、両大学が今後の学術交流や協力の強化について活発な意見交換を行いました。今回の訪問は、チュイロイ大学の絆をさらに深め、国際的な協力を通じて農学と教育の発展に寄与するための重要な一歩となりました。



アンダラス大学来訪

December 18th, 2025

12月18日、インドネシア・アンダラス大学 (Andalas University) から 農学部長・Indra Dwipa 教授、Melinda Noer 教授、Yuerlita 准教授、Khandra Fahmy 准教授の4名をお迎えました。

今回の訪問では、両大学間で進めているダブルディグリープログラムの最新状況について協議し、今後の展望について活発な意見交換が行われました。さらに、博士課程学生の教育支援や研究交流の拡充に向けた取り組みについても話し合わせ、両大学の協力体制を一層強化していくことが確認されました。



IC-GU12 ジョイントセミナー

March 21st, 2025

3月21日、“Diverse Relationship Between Humans and Animals: Production, Conservation, and One Health”をテーマにIC-GU12ジョイントセミナーが開催されました。セミナーは岐阜大学で対面形式にて実施され、オンラインでも同時配信されました。

今回は、UGSAS-GU修了生3名が以下の講演を行いました。

- * 星野 智 氏 “Feeding Management of Zoo-Kept Folivores with Insight into Their Digestive Physiology”
- * Yuli Yanti 講師 (スプラスト・マレット大学/インドネシア) “Issue and Perspective of Livestock Feeding in a Tropic Country: Using Food and Agriculture Byproducts as Ruminant Feed”
- * Boniface Kayang 教授 (ガーナ大学/ガーナ) “Genomics-Driven Poultry Resilience: Enhancing Resistance to Newcastle Disease and Heat Stress in Chickens for a Food-Secure Africa”



連合農学研究科公開講座

12月3日、「虫を通してみる環境学」をテーマとした公開講座が開催され、25名が参加しました。本講座は、地域社会への知識共有や生涯学習の促進、さらには大学と地域社会との連携強化を目的として実施されたものです。当日は、以下の3名の講師による講演が行われました。

- 「『蝶のきた道』から半世紀：ギフチョウが辿った道を探る」
岐阜大学 土田浩治 教授
- 「虫をもって虫を制す！ ちむどんどんアリモドキゾウムシ根絶大作戦」
岐阜大学 日室千尋 准教授
- 「イノベーションのさだめ ~きっとまた、人類は同じ過ちを繰り返すだろうけど」
静岡大学 笠井敦 准教授

本講座では、環境科学と昆虫の関係をテーマに幅広い議論が行われました。参加者は講師に積極的に質問を投げかけ、昆虫の生態や環境における役割に対して高い関心を示していました。

December 3rd, 2025



農学特別講義Ⅲ／学際特別講義Ⅲ

農学特別講義Ⅲ／学際特別講義Ⅲにおいて博士課程学生に国際的な視野と学際的アプローチを提供するため、2名のゲスト講師を招きました。

- ◇ 10月2日：Piyush Pandey教授 アッサム大学（インド）
“Exploring Endophytic Microbiomes for Sustainable Agriculture: The Black Rice Experience”
- ◇ 11月13日：Sanjib Kumar Panda教授 ラジャスターン中央大学（インド）
“Understanding and Developing Abiotic Stress Resilience in Crops”

両講義では、持続可能な農業や作物の環境耐性に関する最新の知見が紹介されました。学生たちは世界の研究動向に触れ、学際的な研究の重要性を学びました。活発な質疑応答も行われ、理解が深まり、研究への意欲が高まった様子が見られました。



総合農学ゼミナール

August 25th-27th, 2025

Best Presentation Award

田口 拓実 (1年)

Presentation Award

杉原 早紀 (1年)
ARSELIN JEANNE (1年)
宮崎 一慶 (1年)
DAHAL SAMIKSHYA (1年)



総合農学ゼミナールは、2025年8月25日から27日にかけて、静岡大学農学部附属地域フィールド科学教育研究センターで開催されました。東京農工大学のOnwona - Agyeman Siaw准教授と東北大学の服部浩之助教による特別講演が行われました。

31名の博士課程1年生が英語で自身の研究について口頭発表を行い、研究発表の機会と科学的コミュニケーション能力を強化する場となりました。Best Presentation Award 1名とPresentation Award 4名が選出されました。

学生からの意見・感想では、特別講演での実践的なアドバイスや、論文投稿やプレゼンテーションに関する有益なヒントが高く評価されました。また、ネットワーキングの機会や、英語での発表が今後の国際学会への自信につながったとの声も多く寄せられました。



研究者倫理・職業倫理

メンタルヘルス・フィジカルヘルス

August 21st-22nd, 2025

2025年8月21日・22日、岐阜大学の石田秀治名誉教授による「研究者倫理・職業倫理」および静岡大学の山本裕之教授による「メンタルヘルス・フィジカルヘルス」が開催され、学生31名が参加しました。

「研究者倫理・職業倫理」では、研究倫理、データ管理、責任ある研究の進め方について学び、ディスカッションでは不正事例を題材に意見交換を行いました。学生からは、「説明が分かりやすく、実践的で役立った」「倫理の理解が深まった」といったという意見が寄せられました。

「メンタルヘルス・フィジカルヘルス」では、講義、CPR（心肺蘇生法）とAEDの実習を組み合わせ、心身の健康の重要性を理解することを目的としました。参加者からは、CPRとAEDの実習を通じて緊急時対応への自信が付き、ストレス管理や十分な睡眠など、健康習慣への意識が高まったとの感想が寄せられました。



国際学会発表における支援



農学分野における国際的な学術交流を促進するため、国際学会で研究発表を行う学生に対し、研究費の助成を行いました。

- 8月2日：Manalo Gianne Bianca Pirote さん（2年）が、オランダ・ユトレヒトで開催された *58th Congress of the International Society of Applied Ethology (ISAE)* において研究発表を行いました。
- 8月25日：Kieu Thi Hoang Yen さん（3年）が、オーストラリア・シドニーで開催された *32nd International Symposium on the Chemistry of Natural Products and 12th International Congress on Biodiversity (ISCP32 & ICOP12)* において研究発表を行いました。
- 12月17日：Yimatsa Nada さん（2年）が、スコットランド・エディンバラで開催された *British Ecological Society Annual Meeting 2025 (BES2025)* において研究発表を行いました。

入学式

開催日：4月7日・10月10日
2025年度新入生数：29名

4月入学：18名（うち留学生5名）
10月入学：11名（うち留学生10名）

学位記授与式

2025年1月～12月 修了者数：25名

3月修了：15名（うち留学生8名）
6月修了：2名（うち留学生2名）
9月修了：8名（うち留学生7名）



【受賞一覧2025】

- **若園彩花**、加川 尚、古屋 康則（2025）。ミナミメダカの雄の繁殖行動を制御する脳内バソトシンの発現動態。公益社団法人 日本動物学会 令和7年度中部支部大会（静岡大会）。大学生・大学院生 口演部門 最優秀発表賞。
- **鈴木聖治**、坂本茉優、戸田陽己、木塚康彦、石水毅、鈴木史朗（2025）。イネ科および双子葉植物IRX10を用いたキシラン還元末端オリゴ糖含有糖鎖のプライマー評価。細胞壁研究者ネットワーク・第19回定例研究会。優秀発表賞。
- **鈴木聖治**、坂本茉優、戸田陽己、木塚康彦、石水毅、鈴木史朗（2025）。キシラン還元末端構造を有するオリゴ糖のプライマー機能とIRX10活性化機構の解析。第42回日本植物バイオテクノロジー学会（神戸）大会。学生優秀発表賞。
- **多賀勇亮**（2025）。植物由来色素構造及び色調変化メカニズムの解明。一般社団法人日本木材学会。第1回日本木材学会優秀学生賞。
- **木下あずさ**、風間広太、河合奈月、大野幸子、鈴木克己、切岩祥和（2025）。ホウレンソウにおいて確認された超音波による種子処理技術の生育制御利用の可能性。園芸学会令和7年度春季大会。若手優秀発表賞。
- **小丸 奏**、橋本啓史、佐藤文男、峯尾雄太（2024）。日本で激増したオオバンはどこからきたのか -GPS追跡による繁殖地と渡りルートの解明-。日本鳥学会2024年度大会。Druid Award。
- **梅村悠太**、宇田川太郎、河村奈緒子、今村彰宏、石田秀治、安藤弘宗、田中秀則（2024）。環状フェニルボロン酸エステルを配向性保護基とした1,2-cis-選択的グリコシル化反応。第8回FCCAシンポジウム・グライコサイエンス若手フォーラム2024。講演賞。
- **Zhiwei Deng**, Gang Ma, Lancui Zhang, Nichapat Keawmanee, Fumitaka Takishita, Keisuke Nonaka, Masaya Kato(2024). Polyethylene bag mitigates juice sacs granulation of 'Harumi' fruit by inhibiting carotenoid degradation and lignin accumulation during storage. The 21st National Postharvest Technology Conference. Outstanding oral presentation "Good" award.
- **Toshiki Mori**, Koichiro M Hirotsawa, Rinshi S Kasai, Tomohiko Taguchi, Yasunari Yokota, Kenichi G.N Suzuki (2024). Unraveling the regulation mechanisms of signal transduction in the inner leaflet of plasma membrane by super-resolution microscopy. 第76回日本細胞生物学会大会。学生優秀ポスター発表賞。
- **仁科里佳子**、五十川陽和、炭澤依里、加藤主税、日野真吾、西村直道（2024）。難消化性デキストリンは盲腸L細胞数を増加させ、GLP-2分泌亢進を介して小腸絨毛を伸長させる。第27回Hindgut Club Japanシンポジウム。奨励賞。
- **Dicky Aldian**, Laila Dini Harisa, Ke Tian, Shuichi Ito, Shigeo Takashima, Atsushi Iwasawa, Masato Yayota (2024). Diverse native forage promotes ruminal fermentation, lipid metabolism, and antioxidants in goats. The 132nd Annual Meeting of Japanese Society of Animal Science. English Presentation Award.